

現代中国における外来語としての日本語

——「料理」について——

小池 清治・清地ゆき子

研究目的

文化庁が発行する『中国語と対応する漢語』（大蔵省印刷局，1978）には、「日中両国語における意味が著しく異なるもの」として「先生」，「勉強」，「迷惑」，「料理」等60数個の語彙を掲げているが，これらの語彙の中には現代に至り日本と同じ意味で使用されるようになった語彙がある。たとえば，「料理」は，前述の書には「（中→日）処理をする 例：＜料理一切＞すべてを処理する。（日→中）菜 例：料理する＜做菜＞ 料理したもの＜做的菜＞ 中国料理＜中国菜＞」とあるが，最近中国で発行された『中国流行新詞語』（注1）には，「飲食暇肴。原为日语。」（おかず。日本語の表現。）（注2）という記述が見られる。また中国で発行されている料理本の題名として『低油无烟水料理』（注3）のように，「菜」ではなく「料理」が使用されているものもある。

本研究の目的は，このように古代から日本と中国で全く異なった意味で使用されていた語彙が，現代に至り日本でのみ使用されていた「意味・用法」が逆に中国へ移入され，日本からの「外来語」として使用されている語について考察したものである。

研究対象語彙は，「料理」，「写真」，「人気」としたが，本稿ではその中の「料理」についての研究結果である。

研究目的は，①対象語彙が，「外来語」として中国に移入され定着したと言えるか。②言えるとしたらその要因（外的要因、内的要因）は何か。

③移入の特徴は何か。である。

注1 欧剌因『中国流行新詞語』（中国人民大学出版社，2000）

注2 （ ）は筆者訳。

注3 夏玛『低油无烟水料理』（农村读物出版社，2001）

1. 両国における「料理」の意味

「料理」の意味について，中国発行の辞典（注4）で確認すると，

- a. 「世話をする。面倒をみる。取り計らう。手入れをする。」
- b. 「物事をはかりおさめる。きりもりする。処置する。」の意味にまとめられる。また日本発行の辞典（注5）では，
- c. 「物事をはかりおさめる。きりもりする。処置する。」
- d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする。」
- e. 「調理した食物。またその膳部。」

とあり，d. と e. の意味は日本でのみ使用されていることが確認できる。ただし1989年第1版の『汉语大词典』には，「日語漢字詞。烹调。亦借指肴饌。」（日本語としては割烹・宴会のごちそうの意）（注6），また1915年初版の『辭源』には，「日本謂烹？曰料理」（日本では調理することを料理するという）（注7）の記述があり，1900年前後來日していた多数の中国人留学生等（注8）により「料理」が日本から中国へ移入された兆候があるが，その後発行されている『辭海』，『古今汉语词典』には，このような記載がなく，一度「外来語」としての移入の機会を得た「料理」がこの時期には定着しなかったことが推察できる。

注4 『汉语大词典』（汉语大词典出版社，1994），『辭源』（商務印書館，1980），

『辭海』（上海辞慕出版社，1999），『古今汉语词典』（商务印书馆，2000）

注5 『角川古語大辞典 第5巻 角川書店，1999』，

『大言海』（富山房，1935）

『日本国語大辞典』（小学館，1997），

『時代別国語大辞典』(室町時代編五 三省堂, 2001)

注6, 7 (~~~~~) は筆者訳

注8 さねとうけいしゅう『中国留学生史談』(第一書房, 1981)

2. 文献による「料理」の古典的使用

両国の文献においては、「料理」がどのような意味で使用されていたのか前述の意味分類で確認した。

a. 「世話をする。手入れをする。面倒をみる。取り計らう。」の意で使用されている文献例

①「語康伯曰、汝若爲選官當好料理此人」
(『世説新語』德行 劉義慶, 南北朝・宋)
(康伯に語りて曰く、汝、若し選官と爲らば、當に好く此の人を料理すべしと)

②「榆生、共草俱長、未須料理」
(『齊民要術』卷五第46 种榆白楊 賈思勰, 南北朝・北魏)
(榆生じ、草と共に長ずるも、未だ料理するを須いず)

③「未須料理白頭人」
(「漫興」詩 杜甫の七言絶句詩, 唐)
(未だ白頭の人の料理をするを須いず)

このa. の意味での日本文献での使用は確認できなかった。しかし、次のb. の意味では日本文献(③~⑦)にも中古の頃からの使用が確認できる。

b. 「物事をはかりおさめる。きりもりする。処置する。」の意で使用されている文献例

①「令史以他答、復往問胡、求其料理、」
(『太平广记・广异记』卷三〇一 戴孚, 唐)
(令史他を以って答え、復胡に問うて其の料理すを求む)

②「黄芽亭子小楼台、料理溪山煞費才。种风怀忘不得、夕阳穷幕海棠开。」
(『游愚园』郁達夫, 1917)
(黄芽亭の台に居ながら、山と川をうまく配置する才能が問われる。吹く風は忘れ難く、夕日は沈みかけ、海を照らしている。)

③「並隨事料理。」
(『令義解』宮繕・貯庫器仗条, 843)
(並び事に隨ひて料理せよ。)

④「この料理、しづかにおもひきたり、おもひもてゆくべし。」

(『正法眼蔵』第二九・山水經 道元, 1253)

⑤「南方へ取奉りたてまつらんとせられけるが、とかく料理に滞つて」

(『太平記』三二・茨宮御位事, 1374)

⑥「万事万端思い切りが能くて、世に処し政を料理するにも卑劣でない…」

(『老余の半生』『福翁自傳』福沢諭吉, 1898)

⑦「天下の政治を料理するなど、長廣舌を振ひ乍ら、…」(『破戒』島崎藤村, 1936)

次に日本でのみ使用されているd. (動詞) とe. (名詞) の使用例を確認する。

d. 「食物として口にあうように材料を整え加工すること。調理をする」(動詞) の意で使用されている文献例

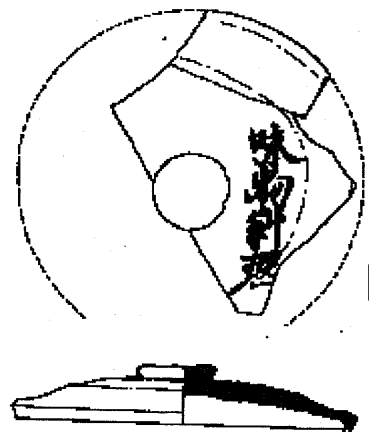
①「料理食物」(『大日本古文書』5,762)

②「内膳司率諸氏伴造各供其職料理御膳」
(『儀式』三・大嘗祭儀中, 平安時代)
(内膳司、諸氏の伴の造を率いて、各々職に供える御膳を料理す)

③「上の風に丸を料理して食てみたいと…」
(滑稽本『浮世風呂』式亭三馬, 1809)
(大阪のようにスッポンを調理して食てみたいと、…)

e. 「調理した食物。またその膳部」(名詞) の意で使用されている文献例

①平城宮出土土器



須恵器の蓋

(『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』奈良国立文化財研究所史料第31冊, 1989)

- ②「料理ハ、魚類精進供ニ味ヒシタツル者是也」
 (『庭訓抄』5月往状, 南北時代後半～室町時代初)
- ③「ものをかき, さん用目きき, いしやしつけ, りやうりほうちや□, こゝろへてよし」
 (『長者教』, 1627)
- ④「此やうなお料理を魚類でたべたい。」
 (『黄表紙』見徳一炊夢一下, 1772)

このe. とd. の意味は, 日本では上代から使用されていたことが確認できる。これは中国語の本来の「処理をする」という意味から派生した日本独特の使用と考えられる。日本での「料理」の意味変化については, 樂竹民の「漢語の意味変化について」(注9)に, 「「料理」の意味の縮小化である。」とある。また①の「味物料理」の表記について佐原真の『食の考古学』(注10)には, 「この土器の年代は, 760年から780年(天平宝字年間)であり, 「味物料理」は食物をととのえてつくったもの, を指すに違いなく, 今日日本で使用している「料理」の起源はここに求めてよいだろう。」とある。本稿では, 「料理」の語源にまでは言及せず, 歴史的には両国で一部異なった意味で使用されていたこと, 前述のb. とe. の意味は日本でのみ使用されていた「意味・用法」であることを確認することにとどめる。

注9 樂竹民「漢語の意味変化について」(『訓点語と訓点資料』1997.9, 1997)

注10 佐原真『食の考古学』(東京大学出版会, 1996) 14～16頁

3. 人民日報・北京日報・北京晩報にみる歴史的 使用推移

それではこの「料理」がどのような経緯で, 現代中国に移入されたのか, その時代の使用言語が確認できるとともに, 大衆の文化, 生活を知ることができる新聞を調査した。対象紙は, 中国共産党中央機関紙の「人民日報」と、首都北京で発行されている「北京日報(北京市共産党委員会発行)」, 「北京晩報(中共日報社発行)」である。

調査は移入の推移を探るため名詞, 動詞の二つの品詞に分け, さらに名詞は, 合成語の構成形式により3分類とした。

「料理」は「並列型」の複合語であるが, この「料理」に他の名詞等がついて合成語を構成する場合, 次のようなA, B, Cの3形式が考えられる。同じ形式をBとCに分けたのは, C形式は日本語では見られない使用例であり, 中国語のみの使用が見られるということは, 語彙の定着を確認できるものであるとして別形式とした。

なお, この調査は各社発行の新聞記事全文(CD-RM)から該当例を調査分析したものである。

①名詞としての使用

A形式(「○○+料理」)(名詞+名詞)

例:「日本料理」、「中国料理」

B形式(「料理+○○」)(動詞+接辞)

例:「料理部」、「料理店」

C形式(「料理+○」)(動詞+接辞)

例:「料理機」、「料理台」

②動詞として使用

D形式 例:「厨料理」

この調査結果から次のことが確認できる。

- ①「外来語」としての最初の使用は, 人民日報が1978年, 北京日報が1989年, 北京晩報が1983年でいずれも意味文類形式のA形式であり, A形式の総使用件数もその他の形式と比べ圧倒的に多い。
- ②「外来語」としての移入は, A形式からB形式, C形式へ, そしてD形式へとその範囲を広げている。
- ③「外来語」としての使用は, 年代と共に著しく増加傾向にあるわけではなく, 20数年間にわたり徐々に増加している。
- ④「中国語本来の意味」としての使用は, 3紙ともに創刊以来現代まであり, 「外来語」としての使用と共存状態にある。

使用例からみる移入のプロセス

3紙の使用例から移入形式の推移を分析するとその移入のプロセスが明確になった。

- 1) 品詞は, 名詞から動詞へと使用範囲を拡大している。
- 2) 名詞としての使用は,
 - ①日本関連記事の中での引用形式

	人民日報 (1946年創刊)					北京日報 (1952年創刊)					北京晚報 (1958年創刊)					
	A 形 式	B 形 式	C 形 式	D 形 式	計	A 形 式	B 形 式	C 形 式	D 形 式	計	A 形 式	B 形 式	C 形 式	D 形 式	計	合計
1978年	1				1					0					0	1
1979年		4			4					0					0	4
1980年					0					0					0	0
1981年					0					0					0	0
1982年					0					0					0	0
1983年	2				2					0	2				2	4
1984年	1				1					0					0	1
1985年		1		1	2					0					0	2
1986年					0					0					0	0
1987年		1			1					0					0	1
1988年	1				1					0					0	1
1989年	3				3					2					0	5
1990年	1				1					0					0	1
1991年	3				3					0					0	3
1992年					0					0					0	0
1993年	2	1	1		4					0	1				1	5
1994年	4				4				1	1					0	5
1995年	2	1		1	4				1	1					0	5
1996年	2			1	3					0	2			5	7	10
1997年	4				4					0					0	4
1998年	1		1		2	4	2		4	10	13	8		5	26	38
1999年	3				3		1			1	13	2		3	18	22
2000年	2			1	3					0					0	3
2001年	1				1	1				1		1		2	3	5
	33	8	2	4	47	7	3	0	6	16	31	11		15	57	120

②非日本関連記事の中での引用形式

③非日本関連記事の中での非引用形式の順
に推移している。

3) 合成語の構成は、概ね

①「国名(日本・中国) + 料理」

②「国名(日本・中国以外) + 料理」

③「名詞(国名以外) + 料理」

④「形容詞 + 料理」

⑤「料理 + 接辞」(日本と同じ使用例)

⑥「料理 + 接辞」(中国独自の使用例)

へと使用が拡大している。このプロセスを確認
するため使用例の一部を挙げる。

①日本関連・引用形式

* …, 以京都的名菜 “懷石料理”, 招待中国人。(人民日報 1978・10・28)

(京都の有名な料理 “懷石料理” で中国人を招待した。)

②非日本関連・引用形式

* …, 毎年新年期間, 大家都要来这儿做 “中華料理”, …。(人民日報 1984・1・31)
(毎年新年になると, みんながここに来て
中華料理をつくり…)

③非日本関連・非引用形式

* 品尝中国料理也是我们的重要一课。

(人民日報 1994・10・22)

(中華料理を味わうことも我々の仕事の一

つである。)

④「国名(日本・中国) + 料理」

* 一个台湾人来吃顿“中国料理”…。

(人民日報 1983・1・30)

(一人の台湾人がやって来て中華料理を頼んだ。)

⑤「国名(日本・中国以外) + 料理」

* “今晚加班吗？请个假吧，我和鲍毕请你吃巴西料理。”

(人民日報1998・5・31)

(今晚は残業しますか。暇をもらいなさい。私と鲍毕があなたにブラジル料理をごちそうしますよ。)

⑥「名詞(国名以外) + 料理」

* …，炸油条、红烧鱼、做线面等、况且餐桌上1/3的料理来自厦门。

(人民日報1994・6・10)

(揚げパン、煮魚、麺など食卓の3分の1の料理はアモイからきた。)

⑦「形容詞 + 料理」

* …，那是我家的传统菜色，也是她的拿手料理：…。

(北京晚報1999・5・5)

(これは我が家の伝統的な料理で母の得意料理でもある。)

⑧「料理 + 接辞」(中国独自の形式)

* …，料理柜，灶柜，排油烟机，燃气灶具等系列家用厨房设备…。

(人民日報1993・5・7)

(調理棚，ガス台，換気扇，ガス器具などのシステムキッチン…。)

この「料理(国)棚」の使用は日本では見られず、中国語の造語力(注11)によるもので、この形式が中国で使用されようになったということは、「料理」が「外来語」として中国に受け入れられ定着しつつあることの表れであると考え。

2. 動詞

* 大酒店、大饭店一般都有名厨料理，技术力量强，卫生服务，又搞得很好。

(人民日報1995・9・6)

(大きなレストランやホテルではだいたい有名なコックが料理を作り，その技術力は優れていて，衛生やサービスもすばらしく…。)

注11 興水優 『中国語の語法の話』(光生館，19851)

4. その他の国内紙にみる現状分析

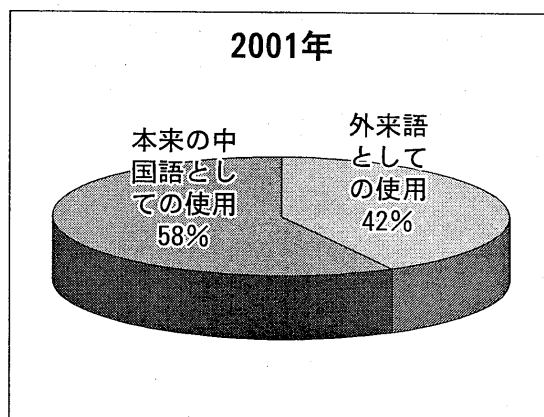
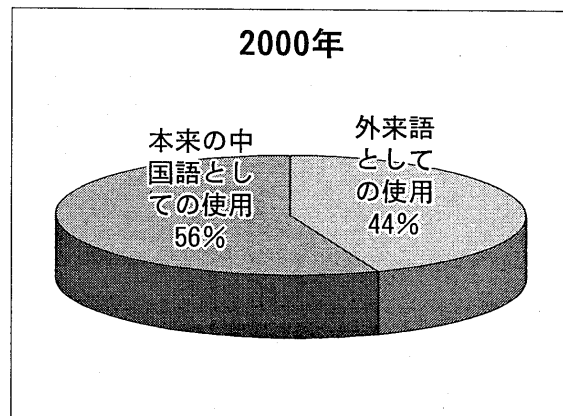
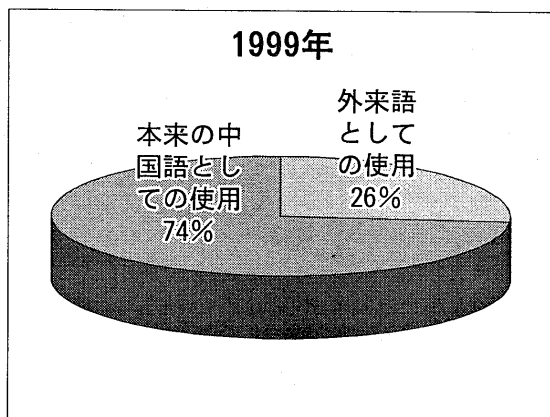
4.1 8紙にみる外来語としての使用率

前述の3紙の調査結果から「料理」の移入の一つの特徴として、「外来語」としての使用と「中国語本来の意味」としての使用が共存状態にあるとしたが，その共存の比率がどの程度であるのかその他の国内紙8紙において調査した。(調査対象期間1999年～2001年10月29日まで)。国内紙8紙とは，環球時報，江南時報，健康時報，華東新聞，華南新聞，國際金報，市場報，諷刺與幽默の8紙で，人民日報社が著作権を持つ「人民網檢索」から調査したものである。

新聞8紙にみる

「外来語」としての使用と「中国語本来の意味」での使用の使用比率

	「外来語」 としての 使用件数	「中国語本来 の意味」として の使用件数	総件数	「外来語」と しての 使用率 (%)
1999 年	11	31	42	26
2000 年	28	35	63	44
2001 年 (1/1~10/29)	26	35	61	42
合計 (件)	65	101	166	33



この調査からも前述の3紙での調査結果と同様、1999年から2001年（10月29日まで）の3年間においても「料理」の「外来語」としての比率は増加しつつあるが、「中国語本来の意味」と共存状態にあることがわかる。

4.2 258紙にみる使用例の分析

最後に、「料理」が中国全土に「外来語」として使用されているのか、全国紙地方紙を含めた258紙を対象にその使用例を確認した。（調査対象期間2000年から2001年10月29日まで）

①「名詞（国名以外）＋料理」

* 大连海鮮料理味道鲜美，独具特色，可以让您大饱口福。

（中国商報 2000・4・24）

（大連の海鮮料理は味がすばらしく，独自の特色があり，あなたに美味しい味を味あわせてくれるでしょう。）

* 鱼类料理的吃法：鱼类料理上都会有柠檬，…。
肉类料理的吃法：…。

（江南都市報 2000・2・23）

（魚料理の食べ方。魚料理の上には必ずレモンがあり…。肉料理の食べ方は …。）

* 取用的调味酱不应直接淋在料理上，应放在盘子的外侧。（江南都市報 2000・2・23）
（調味料は直接料理にかけてはならず，お皿の外側に置くべきである。）

この使用例は「料理」が名詞として単独で使用されている例であり，定着度が伺える。

②「形容詞＋料理」

* 甜咸料理皆可使用，…。

（海峡都市報 2001・10・11）

（甘い料理や塩辛い料理には皆使用することができる…。）

③「料理＋接辞」（中国独自の形式）

* …作为目前市场上最先进、品质最好的食品料理机…。

（解放日報 2001・6・26）

（目下市場の品質の最も良い最新の調理器

具として…)

④動詞

* 因而, 近几年来, 每逢周日, 我必料理一餐火锅, …。

(三秦都市报 2001・8・2)

(だから, ここ数年週末の度に必ず鍋料理を作る…。)

* 保鲜膜轻轻一撕, 便可保住食物的美味, 为料理食物带来极大便利。

(北京青年报 2000・5・14)

(サランラップをちょっと切り取るぐらいで, 食物の美味しさを保つことができる。食べ物を料理することが, とても便利になった。)

このように, 「料理」は「外来語」として, 前述の3紙以外の全国紙地方紙にも使用されていることが判明し, その移入が中国全土に及んでいることが確認できる。

5. 移入の特徴

次にこの移入をもたらした要因(外的要因と内的要因)を考える。ここでいう外的要因とは, 移入を容易にする社会的背景等を指し、内的要因とは, 「料理」という語彙から発生する要因を指すものである。

5.1 外的要因

まず移入の外的要因の一つとしては, 人民日報, 北京晩報, 北京日報で確認した通り, 移入開始時が1978年であり, 日中国交回復後, 日中友好条約成立の年であることから, 戦後の日本と中国の政治, 経済, 文化の交流が言語の交流をももたらしたと考えられる。「外来語的吸収要根据国情与需要, ……」(外来語の吸収は、国の状況や需要により……)(注12)とおり, 日中国交回復がこの「料理」を「外来語」として受け入れる契機となったといえる。

外的要因の二点目は, 「中国の市場経済の改革, 開放に伴う, 中国国内での需要」であると考ええる。本来, 中国語においては, 「おかず」の意を表す語彙は「菜」であり, 「中国料理」は「中国菜」, 「日本料理」は「日本菜」と表現していたわけであ

るが, 市場経済の改革, 開放政策により, 日中間の物流も盛んになり, 食文化の豊かな中国において「日本料理そのもの」や「日本料理店」等の商業に関する興味や関心, また「日本料理店」の営業に伴い, 日本で使用していた表記を変えることなく, 中国でもそのまま使用されるに至ったと推察する。

5.2 内的要因

前述したとおり, 元来中国では「日本料理」を「日本菜」と表現していたが, これは中国語としては使いにくい3語の合成語である。中国語基本の語構成である2語の複合語のほうがさらに複雑な合成語を作りやすく, この語構成の点から「料理」は中国語として使いやすく, 定着化につながったものと考ええる。

内的要因の二点目は, 動詞としての「料理」のもつ意味である。中国語では, 今まで「料理する」は, 「烹饪」, 「烹调」と表現していた。「烹饪」, 「烹调」は, いわゆる「調理する, おかずを作る」という意で, 日本語の「調理する」の意味に近い。日本語の「料理」には, 前述の日本の辞典でも確認したように, 「食物として口に合うように材料を調え加工すること。」(『日本国語大辞典』小学館, 1997)や「材料にしかる手を加え、味をつけておいしく食べられる状態にすること」(『時代別国語大辞典』室町時代編五三省堂, 2001)とあるように, 単に「調理する」のではなく, 「おいしく、食べられるように調理する」の意がある。この「料理」のもつ意味が中国語の「烹饪」, 「烹调」より使用意味範囲が広いことが, 「料理」が中国に「外来語」として移入されるに至った, 内的要因の一つと考える。

三点目は, 中国語の持つ造語力である。中国語の複合語がさらに複雑な合成語を造る一つの形式として, 「機」や「台」のような接辞をつけて合成語を構成する(注13)が, 「料理」の場合も, 並列型の複合語「料理」に「機」や「台」をつけて「料理機」や「料理台」のような複雑な合成語を構成するようになった。これは, 中国語の語構成の規則に沿ったものであり, 「外来語」を中国語として受け入れ、さらにその使用範囲をひろげていく中国語の特性で, 同じ表意文字をもつ日本語を受け入れやすくしている土壌でもあったと考える。

このように「料理」は、外的要因を背景に内的要因である語構成、語の特性、中国語の造語力を借りて使用範囲を広げ、本来の中国語より、「使い易い語彙」として受け入れられ、定着に至ったと結論付けた。

「外来語」としての「料理」は20数年間という長期借用期を経て、中国に移入された、その後の使用状態は、「料理」の「中国語本来の意味」としての使用と共存状態にあるが、筆者はこれを「外来語」移入の一つの形式として「長期共存型(仮称)」と名付けた。

「料理」は今後もこの共存状態が続くのか、また「料理」は、主に文化の分野で使用される語彙であるが、その他の政治、経済の分野で使用される語彙の場合に形式化が可能であるか、さらなる考察の必要があると考える。

注12 薛克謬「“写真”的来龙去脉」(『語文建設』1996. 第7期, 1996) 23頁

注13 輿水優『中国語の語法の話』(光生館, 19851)

参 考 文 献

- 沈国威 「新漢語研究に関する思考」(『文林』32号, 1998.3)
- 高名凱・劉正淡 『現代中国語における外来語研究』(鳥井克之訳, 関西大学出版部, 1998)
- 沈国威 「現代中国における日本製漢語」(『日本語学』Vol.12-8, 1994)
- 荒川清秀 「日本漢語の中国語への流入」(『日本語学』17号, 1998)

引用文献

- 目加田誠 『世説新語』(中国古典21, 明治書院, 1975)
- 田中静一・小島麗逸・太田泰弘訳 『齊民要術』(雄山閣出版, 1997)
- 石聲漢校釋 『齊民要術今釋』(新华書店, 1957)
- 仇兆鳌註 「漫興」詩『杜詩詳註』(廣文書局, 1693)
- 王汝濤主編 「广异记」『太平廣記選』(上齋魯書社, 1984)

- 郁達夫 「游愚園」『郁達夫全集』(第一卷, 折江文芸出版社, 1992)
- 黑板勝美編 『律・令義解』(第二十二卷, 吉川弘文館, 1966)
- 道元 『正法眼蔵』((二), 水野弥穂子, 岩波書店, 1993)
- 福沢諭吉 「老余の半生」「福翁自傳」『福沢諭吉全集』(第7巻, 岩波書店, 1959)
- 山田晃注釈 「破戒」『島崎藤村集I』(角川書店, 1971)
- 『大日本古文書』(5, 東京帝国大学, 1903)
- 「皇太神宮儀式帳」『新校群書類従』(第1巻, 内外書籍, 1931)
- 石井恭二編 「儀式」『続日本古典全集』(現代思潮社, 1980)
- 岩神保五彌校注 『浮世風呂』(二編巻之上, 岩波書店, 1989)
- 『庭訓抄』(古典史料12, スミヤ書房, 1970)
- 朝倉治彦校訂 「長者教」『古典文庫』(第82冊, 古典文庫, 1954)

(以上、清地ゆき子)

【あとがき】

1985年3月より1986年2月までの約一年間、中華人民共和国湖北省武漢市にある武漢大学外語学科日本語研究室の招きに応じて、客員教授として日本語教育に従事した。その際、中国語に流入した日本語の調査も研究課題とし、若干の資料収集を行った。

「入口」「出口」という日常的和語が「入口」「出口」という形で流入していることに気付き、このような日常語がなぜ借用されたかについて考えたことがある。

中国語では「人の出入り口」には、ふつう「門」を使用し、「口」は用いない。例えば、日本語の「非常口」を中国語では「太平門」という。日本語の「口」は門の意を派生させているが、中国語にはこの意が「口」には無いのである。

「門」は本屋とは別の独立した建築物である。一方「出入り口」は本屋の一部である。後者を表す特別な語彙を中国語は備えていなかった。その

不備を補うものとして「入口」「出口」が借用されるに至ったのであろう。

清地ゆき子氏の論文は、このような素朴なものではなく、現地での新聞調査を始めとする本格的調査に基づく論考である。規約上、共著としたが、実態においては本論は清地氏の単著である。

因みに、清地氏の論文指導について述べておく。

当初から一年半ほど、加藤二郎教授が指導なされていたが、2002年8月17日、教授が急逝なされ、急遽小池が指導することになった。また、実際の細かな指導助言は、松金公正講師が行われた。小池は、ただただ感心し、励ますことを役目と考え実行したに過ぎない。（以上、小池清治）

Summary

An analysis of Japanese adopted as words of foreign language in Modern Chinese

This research is on how imported Kanji words have been made root in modern Japanese with completely different meanings, and the Japan-origin meanings/usages have been adopted in modern Chinese as words of foreign origin.

"Cooking", "photograph" and "popularity" are taken as object of this study and I have analyzed the process of adoption, its features, range of naturalization and the factors of naturalization based on newspapers being issued in China.

The analysis shows that there are two patterns of form of adoption. One is a " pattern of long adoption term and coexistence "(temporary name). The other one is a " pattern of short adoption term and independent"(temporary name). "Cooking" and "photograph" belong to the former pattern and "popularity" belongs to the latter.

The background of this difference is based on feature in meaning/usage of each word and the fields where each word is used. The two common factors of naturalization in both patterns are the external one and the internal one. The former is close relationship between nations politically, economically and culturally. And the latter is the high word-building capacity of Chinese.

Through this analysis I conclude that in addition to the fact that Japanese and Chinese are both ideogram, above-mentioned external and internal factors made these three words are firmly naturalized as words of foreign origin in modern Chinese.

(2003年4月15日受理)